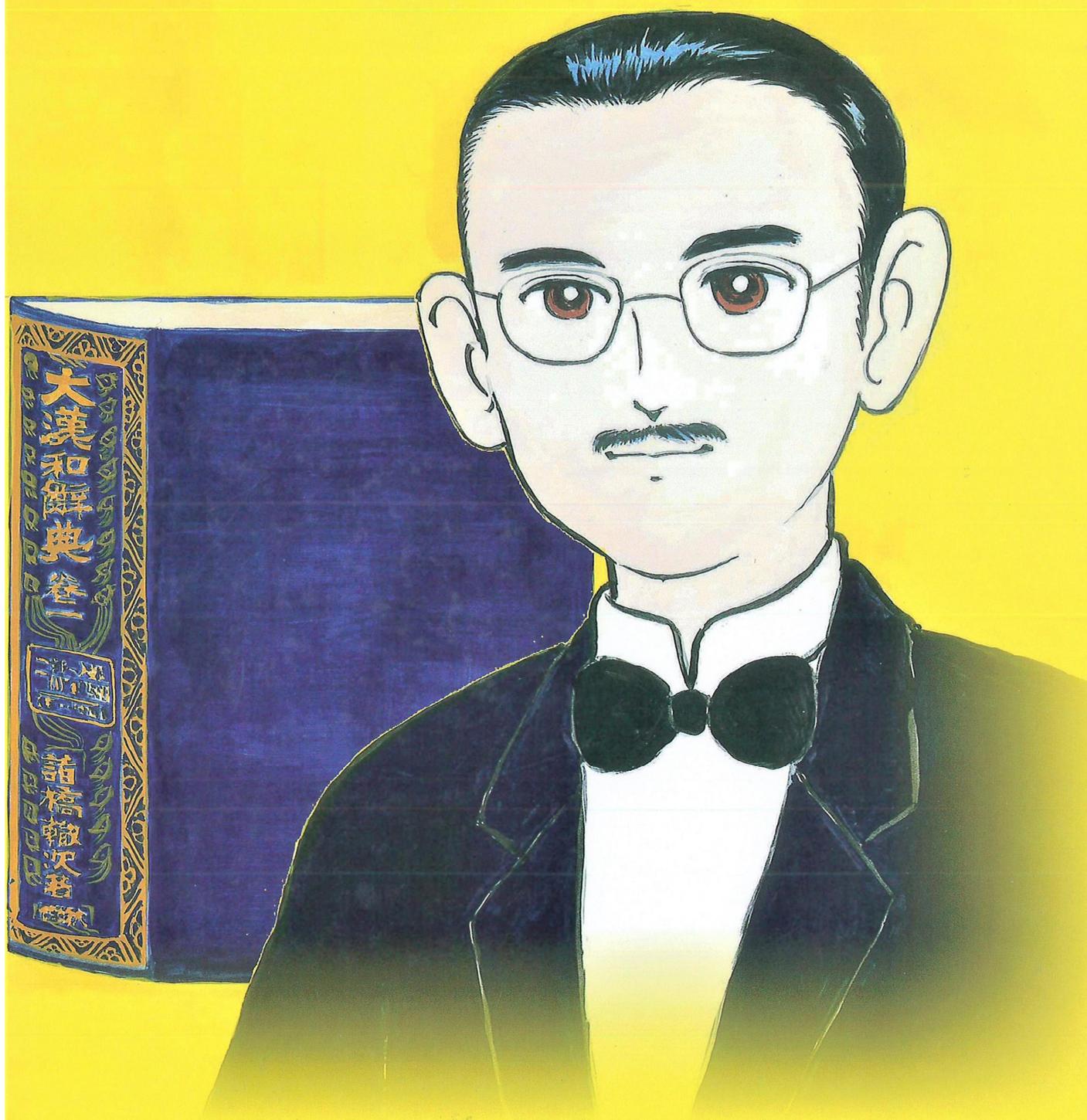


諸橋轍次博士ものがたり



三条市

諸橋轍次博士ものがたり



絵

文

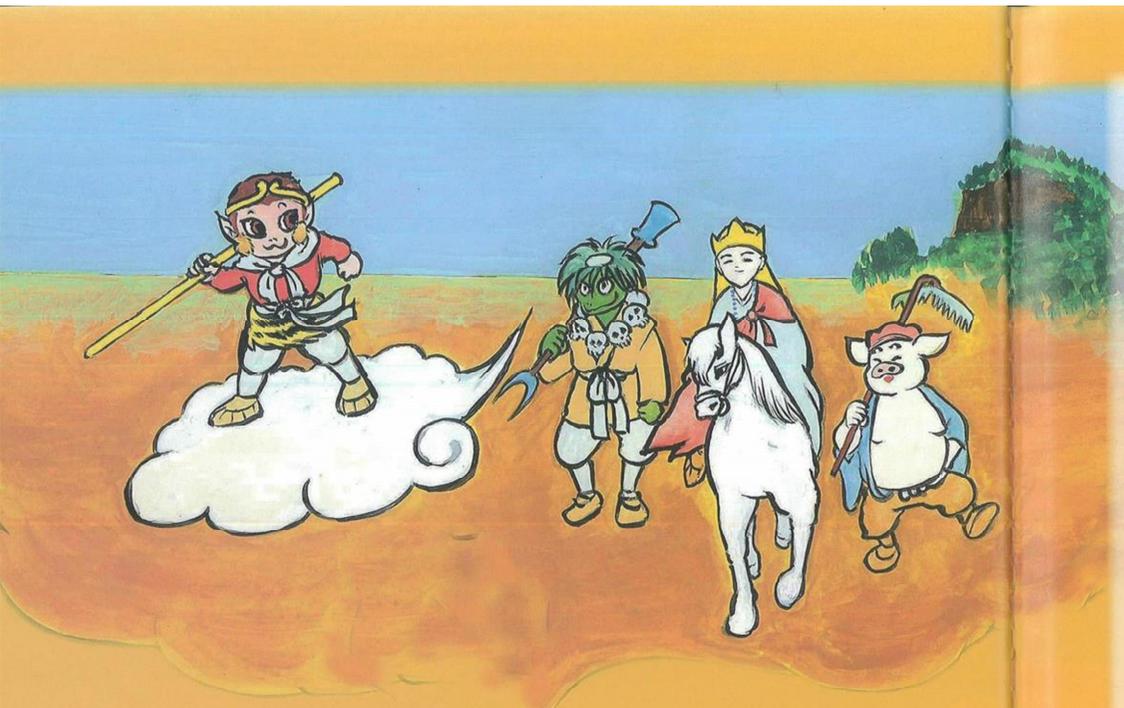
高橋郁丸

諸橋轍次博士は明治十六年（一八八三年）六月四日、新潟県南蒲原郡下田村（現在の三条市庭月）に生まれました。諸橋博士のお母さんはお話がとても上手で、いろいろな話をしてくれました。

その中でも、諸橋博士が大好きだったのが「西遊記」のお話です。岩山から生まれた孫悟空が、三蔵法師というお坊さんを助けて、お釈迦様の教えを天竺（インド）まで受けに行くお話です。悟空は、河童の沙悟浄やブタの猪八戒を家来にして、襲ってくる妖怪たちと闘います。

諸橋博士は八木鼻の岩を見ては、悟空が生まれた岩山を連想し、ワクワクしていました。

※お母さんは諸橋シズといました。



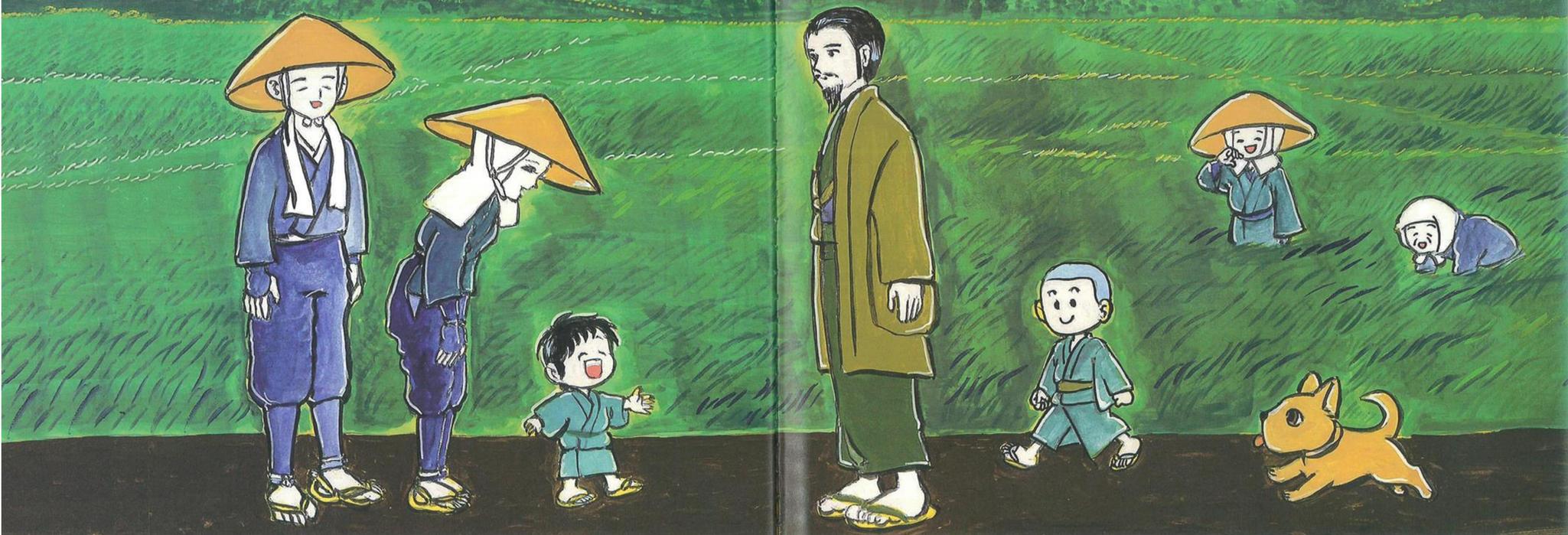
諸橋博士のお父さんは、中国の漢文を勉強して
いました。鞆次という名は、お父さんが好
きだった「蘇轍」という中国の文人から一字
をいただいてつけられたものでした。

諸橋博士が五歳になると、お父さんは「三字経」を読ませました。この本を読んで、漢文が身近なものになりました。

諸橋博士のお父さんは、物知りて誰にでも
優しい人だったので、村中の人たちから尊敬
されていました。三条の町なかに大きな学校
ができたときに、「校長先生になってください」と
頼まれましたが、お父さんは生まれ育った
庭月を離れませんでした。そんな諸橋博士は
お父さんを誇りに思っていました。

※お父さんは諸橋安平。教師でした。

※「三字経」子ども教育用の本



諸橋博士は小学校を卒業すると、お父さんの勧めで奥畑米峰という先生の「静修義塾」に入りました。ここは主に漢文で書かれた中国の本を読んで勉強する塾でした。

ある時、友人と掃除をしていた諸橋博士は、不注意から奥畑先生の大切にしている鉢植えを折ってしまいました。



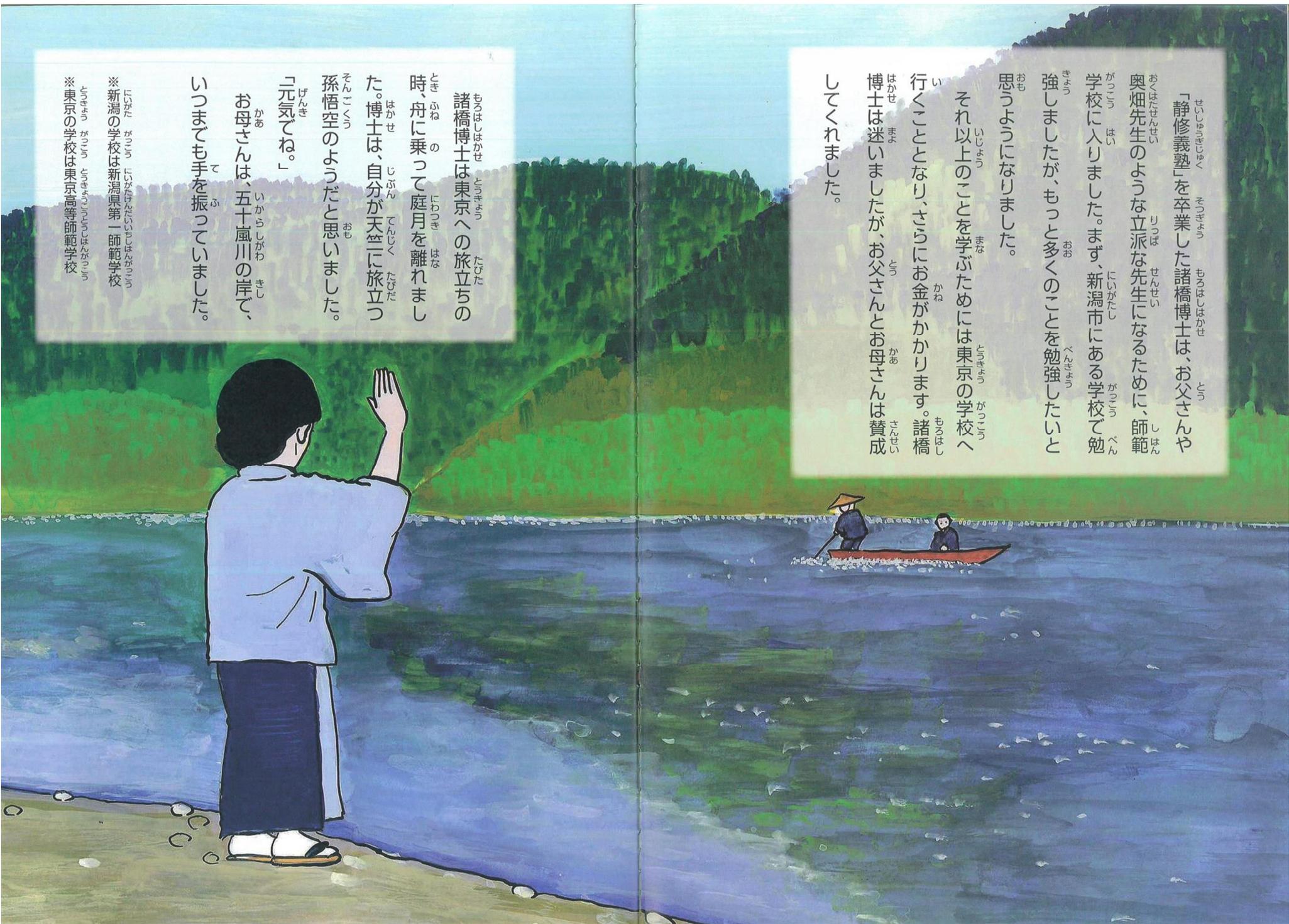
頭を下げる諸橋博士を、奥畑先生は一言も叱りませんでした。先生は、折れた鉢植えを惜しいという気持ちより反省する生徒の気持ちを大事にしたのです。奥畑先生の気持ちが伝わって、諸橋博士は心から反省し、先生のように相手の心を大切にする教師になりたいと思いました。

「静修義塾」を卒業した諸橋博士は、お父さんや奥畑先生のような立派な先生になるために、師範学校に入りました。まず、新潟市にある学校で勉強しましたが、もっと多くのことを勉強したいと思っようになりました。

それ以上のことを学ぶためには東京の学校へ行くこととなり、さらにお金がかかります。諸橋博士は迷いましたが、お父さんとお母さんは賛成してくれました。

諸橋博士は東京への旅立ちの時、舟に乗って庭月を離れました。博士は、自分が天竺に旅立った孫悟空のようだと思いました。「元氣だね。」お母さんは、五十嵐川の岸で、いつまでも手を振っていました。

※新潟の学校は新潟県第一師範学校
※東京の学校は東京高等師範学校

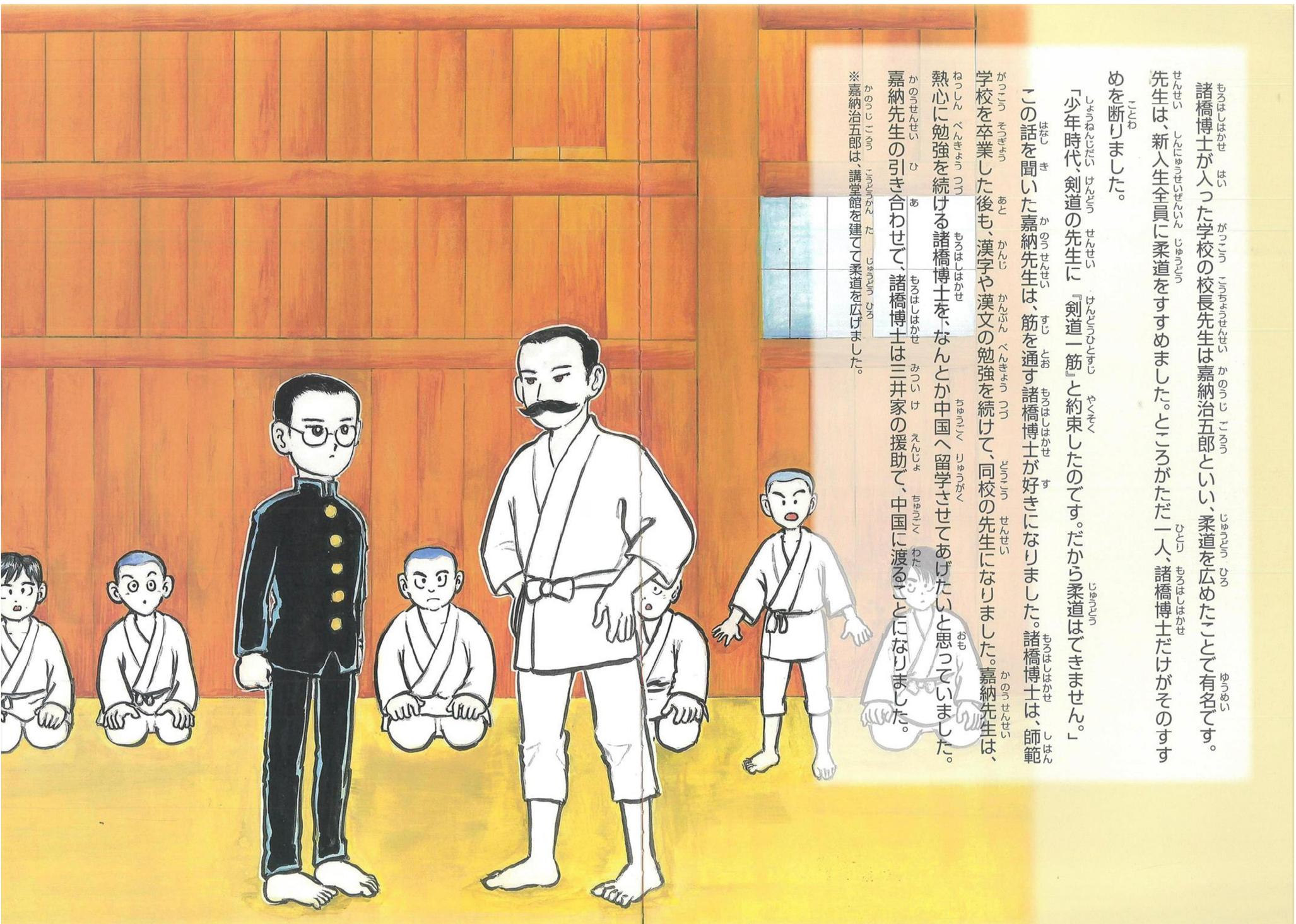


諸橋博士が入った学校の校長先生は嘉納治五郎といい、柔道を広めたことで有名です。
先生は、新入生全員に柔道をすすめました。ところがただ一人、諸橋博士だけがそのす
めを断りました。

「少年時代、剣道の先生に『剣道一筋』と約束したのです。だから柔道はできません。」

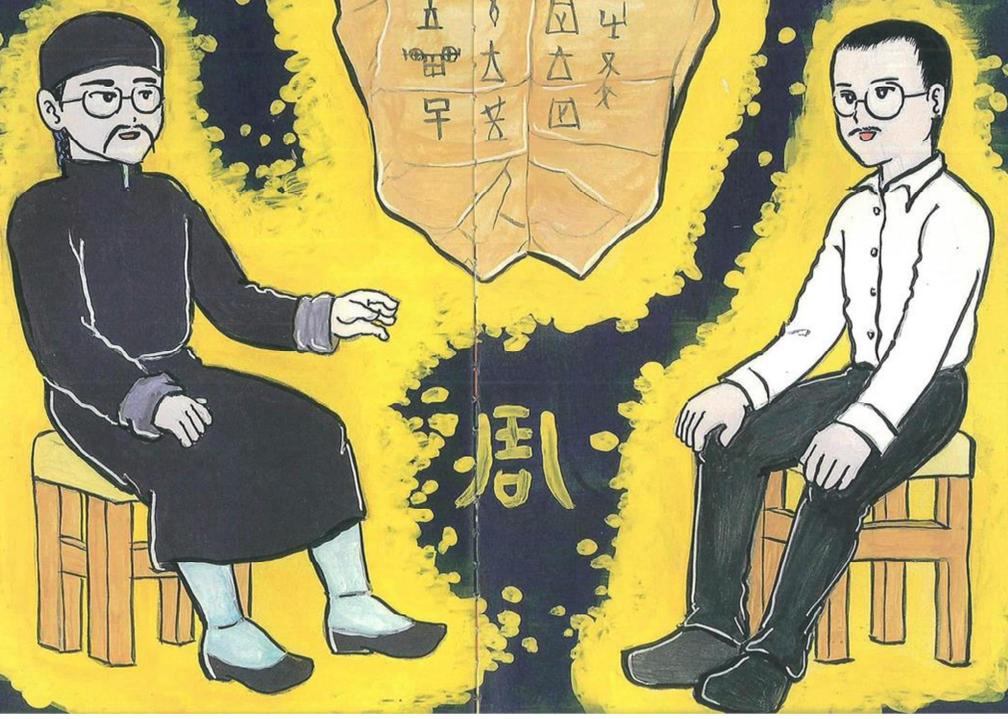
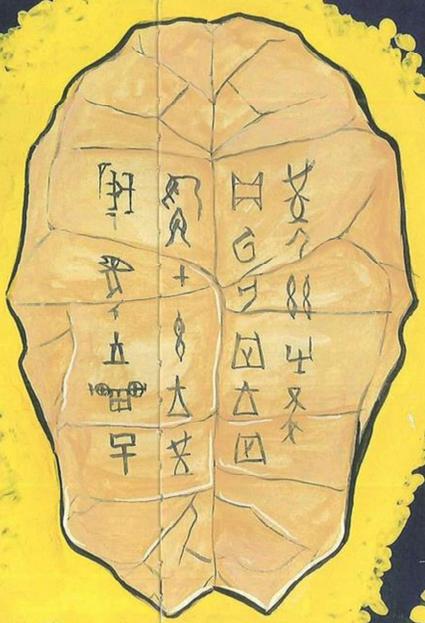
この話を聞いた嘉納先生は、筋を通す諸橋博士が好きになりました。諸橋博士は、師範
学校を卒業した後も、漢字や漢文の勉強を続けて、同校の先生になりました。嘉納先生は、
熱心に勉強を続ける諸橋博士を、なんとか中国へ留学させてあげたいと思っていました。
嘉納先生の引き合せて、諸橋博士は三井家の援助で、中国に渡る事になりました。

※嘉納治五郎は、講堂館を建てて柔道を広げました。



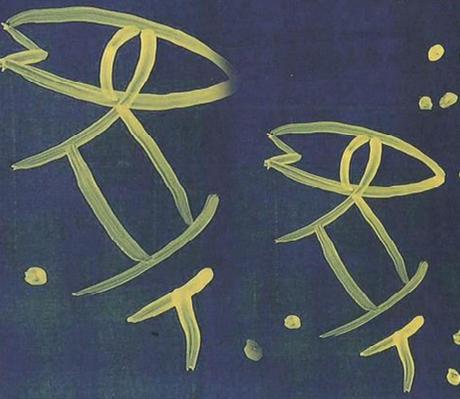
大正七年（一九一八年）、諸橋博士三十六歳の年に、初めて中国を訪れました。
 諸橋博士はまず、最古の漢字「甲骨文字」を解読した学者、王国維に会いに行きました。王国維は日本の若い学者の訪問をとて喜び、漢字への思いを熱心に語ってくれました。

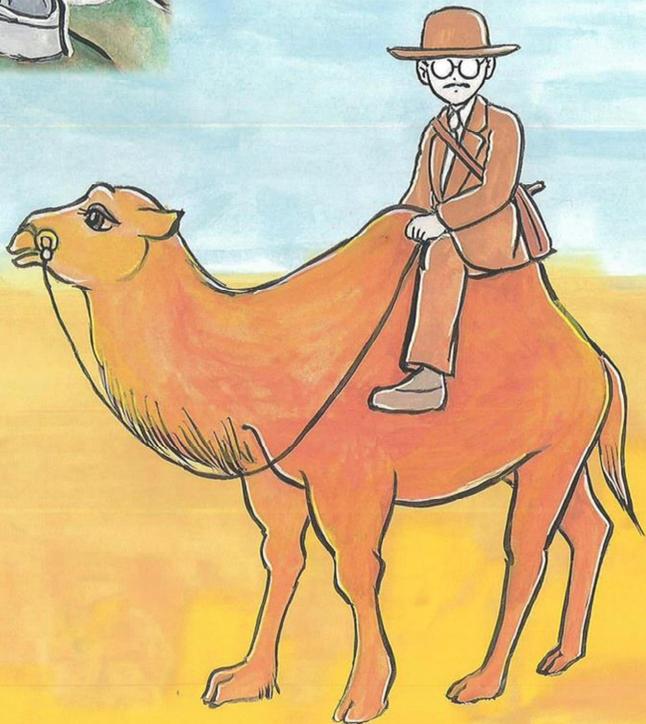
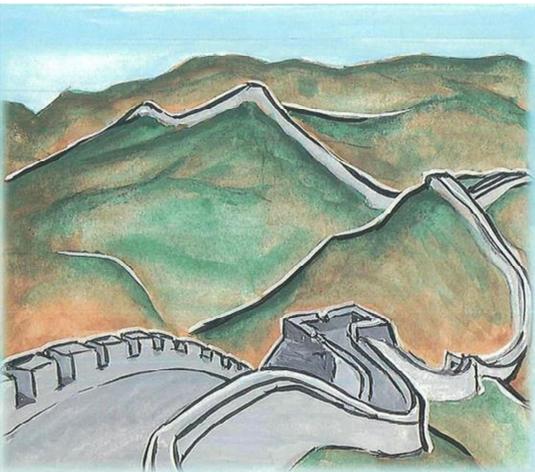
諸橋博士は紫禁城や天安門、古い都である殷の発掘現場など、歴史的な地を訪れて見学をしたり、古本屋で貴重な本を探したりしました。



子どもの頃、庭月でお父さんから教わった「三字経」やお母さんから聞いた「西遊記」の世界、その故郷の中国に
 来ているんだと思うととてもうれしくて、あつという間に
 留学の期間が終わってしまいました。

※「甲骨文字」は、動物の骨に刻まれていた最古の文字





日本に帰った諸橋博士は、中国に正式に留学して、もっと勉強したいと思うようになりました。その資金にするために家を売ることも考えていました。

勉強熱心で優秀な諸橋博士の話聞いた三菱の総帥、岩崎小彌太社長は、中国留学を援助すると申し出ました。貴重な本や美術品を見つけたら、岩崎社長の持つ「静嘉堂文庫」に買ってくるのが中国留学の条件でした。

大正八年（一九一九年）に再び諸橋博士が中国に渡ると、中国では反日運動が起きていて、行動が制限されていました。それでも精力的に多くの場所を尋ね、小さい頃にお父さんから教わった歴史上の人の墓を見つけた時には、庭月から出ることもなく亡くなった両親を思い出し、感謝の念でいっぱいになりました。